

## 学校コンサルテーションの実践的方法に関する研究

黒崎 佑乃 (Yuno Kurosaki) 指導：菅野 純

### 【問題と目的】

スクールカウンセラー(以下 SC と記載)の職務内容の一つであるコンサルテーションは、教諭からのニーズが高いことも明らかになっている(荒木・中澤, 2007)。

教師がコンサルタントである SC に期待するものとして、教師の忙しさへの理解、苦勞・努力した点の把握、学校や教師の立場への理解や、先生のやる気を喚起するようなエンパワメント等が挙げられており(小林・庄司, 2007; 小林, 2008; 田中・内野, 2010)、問題解決の方略を選択する際に、コンサルティの立場や能力をどのように活かすかが援助サービスの鍵を握ることが示唆される(石隈, 1999)。このように、教師のもともと持っている能力や経験を生かすことが重要であると指摘される一方で、コンサルタントである SC が実際に教師や学校のどのような部分に着目することでそれらを見出し、活かそうとしているのかということには触れられていない。また、コンサルティである教師にとって、コンサルタントである SC のどのような言動から教師の自己不確実感が軽減され、子どもと継続して関わる意欲が増すのかということに関する記述はあまり見られない。

そこで、本研究における研究 I では、教師を対象にインタビュー調査を行い、SC とのコンサルテーションを通じて教師が SC のどのような言動からエンパワメントされているのかを明らかにすることを目的とした。研究 II では、SC を対象にインタビュー調査を行い、コンサルテーションを行う上での SC の視点を明らかにすることを目的とした。

### 研究 I

#### 【方法】

調査対象：中学校・高等学校に勤務する教諭 5

名。平均年齢 41 歳。

調査方法：2012 年 10 月～11 月に半構造化面接調査を行った。主に SC に児童生徒の問題や悩みを相談した経験について詳細に尋ねた。

分析方法：音声データの逐語録から、主に①教諭をエンパワメントさせた SC の関わり、②各教諭特有の要因に対応した SC の関わり、③SC への要望、という 4 つの視点について抽出した。

### 研究 II

#### 【方法】

調査対象：小中高等学校に勤務する SC 4 名。平均年齢 32 歳。

調査方法：2012 年 10 月～12 月に半構造化面接調査を行った。主に教諭と連携をとったケースの詳細や、教諭と関わる際に SC が行う工夫について聴取した。

分析方法：音声データの逐語録から、主に①コンサルテーション概要、②各教諭特有の要因による SC 対応の変化、③各教諭特有の要因の見出し方、活かし方、④各教諭をエンパワメントする SC 対応という 4 つの視点に抽出した。

#### 【結果と考察】

教諭特有の要因の見出だし方、活かし方について、SC は普遍的な教諭あるいは学校の存在についてのイメージを持ちながら、授業や会話からの観察、他教諭からの情報、あるいは情報を引き出すための自分なりの言葉を用いながら教諭特有の要因を見つけていることが推測された。エンパワメントについては、本研究では全ての SC がエンパワメントについて回答したが、教諭のなかには、教諭自身がエンパワメントされるという考えを明らかにしなかった協力者もあり、その必要性を観察する必要があると推測された。